燦然（さんぜん）と屹立（きつりつ）する精神
――アンリ・デュティユー――

船山 隆

アンリ・デュティユー　©日本美術協会／産経新聞

私は昨年の春、しばらくぶりに1か月パリに滞在した。パリに新しくできたホール、フィルハーモニー・ド・パリのコンサートを聴くためである。その時は、先月90歳で亡くなったピエール・ブーレーズ――パリ音楽界の中心人物――がまだ存命中で、新聞には連日ブーレーズの顔写真が掲載されていた。そのなかにアンリ・デュティユー（1916～2013）の晩年とおぼしき写真があり、音楽会の案内か批評かと思って記事をみるとそうではなく、かなり政治的な問題なので驚いた。デュティユーは、1946年にパリ音楽院の同級生のジュヌヴィエーヴ・ジョワ（1919～2009）と結婚し、パリのセーヌ川のサン＝ルイ島に長い間居をかまえていた。デュティユーの初期の傑作のピアノ・ソナタはジョワ夫人のために作曲された作品で、このすばらしいピアニストによって世界初演されてアンリの名前を一躍広く世に知らせることになった。この二人がこよなく愛したサン＝ルイ島のアパルトマンの入口に、「ここにデュティユーが住んでいた」というプレートを作ろうとしたら、住民たちから強い反対の声があがったというのである。ル・モンド紙やフィガロ紙などに大きな記事が出ていたが、デュティユーは、第二次世界大戦中にナチスに協力的な映画音楽を作曲したことが理由であるらしい。私にとって、このサン＝ルイ島というカルチエ（場所）のユダヤ人を中心とした人々の主張は、ほとんど言いがかりに近いように思われる。ほどなく論争は終焉（しゅうえん）し、サン＝ルイ島のアパルトマンにはプレートがはめられることになった。

ジョワ夫人と自宅にて　©日本美術協会／産経新聞

精密性と厳格な論理を駆使

デュティユーは、ひじょうに強い精神の持ち主で、政治的にも音楽的にも時代の潮流にながされることなく、時代のなかで屹立して燦然と輝いている。第二次世界大戦後、ヨーロッパの音楽には大きな地殻変動のような新しい動きがおこり、いわゆるシェーンベルク楽派の影響のもとに、12音技法による音楽が、レイボヴィッツ、メシアン、ブーレーズらによって創られることになった。しかしデュティユーは、こうした潮流とは生涯にわたって一線を画し続けた。デュティユーは閉鎖的なグループや流派に属することなく、ドビュッシー、ラヴェル、ルーセルらのフランス音楽の伝統の上に立ちながら、彼独自の坑道を時間をかけて掘り続けたのである。デュティユーは、多作家のイメージからはほど遠く、醒めた精密性と厳格な論理を駆使しながら、珠玉のような少数の作品を生み出すのである。デュティユー自身の言葉によればこうなる。「仕事というのは体操と同じで、毎日欠かさずやることによって筋肉がつく。ボードレールも言っていたように、毎日続けることで資本が利子を生むように、少しずつアイディアが実り、ひとつの作品に結実する」

ボードレールの詩的イメージ豊かに

このような孤独な密室のなかで時間をかけてつむぎだされる音の世界は、旋法性と無調性の間で、独特な「変奏」の技術を用いて、水晶のような輝きにみちた音のミクロコスモスへと変化する。なかでも磨きのかけられた楽器法は、特筆に値するだろう。しかしそう

はいっても、その音楽の世界は、抽象的な乾いたものではなく、豊かな芸術的な感性による詩的なイメージにみちあふれているのである。そのことを理解していただくために、カンブルラン指揮の読響がジャン＝ギアン・ケラスを独奏に迎えて6月定期で取り上げるチェロ協奏曲〈遥かなる遠い世界〉（1970）と、今月のプログラム〈音色・空間・運動〉（1978）の二つの作品をとりあげ、すこし詳しく論じてみよう。二つの作品とも、素晴らしいチェリスト、ムスティスラフ・ロストロポーヴィチと深く結びついている。

〈遥かなる遠い世界〉はロストロポーヴィチの委嘱で作曲され、1970年7月25日、エクサン・プロヴァンス音楽祭で、ロストロポーヴィチのチェロ、ボド指揮のパリ管によって初演された。全5楽章から構成され、連続して単一楽章風に演奏されるが、各楽章の冒頭には、デュティユーの愛した詩人で『悪の華』の作者、一時サン＝ルイ島の住人であったボードレール（1821～1867）の詩句が引用されている。各楽章のタイトルと引用されている詩句は以下の通りである。1 “謎”（……そしてこの象徴的な自然で……、出典：詩XXVII）。2 “眼差し”（お前の眼から、お前の緑色の眼から流れでる毒。私の魂が震え、私の魂を逆さまに映している湖水……、出典：毒）。3 “うねり”（お前は黒檀のような海、帆と漕ぎ手と焔のマストのまばゆいような夢を秘めている、出典：髪）。4 “鏡”（……私たちの心臓は、二人の魂の、あの対の鏡に倍の光を反映させる巨大な炬火になろう、出典：恋人たちの死）。5 “讃歌”（……お前たちの夢を大事にせよ：賢者は愚者のように美しい夢を持たないものだ、出典：声）。

フランス象徴主義への道をひらいたボードレールの詩は、いわゆる「万物照応（コレスポンダンス）」の詩のなかで示したように、「匂と色と響きとが、かたみにうたう」のであり、デュティユーの音楽は、ボードレールの詩句のイメージをいっそう広く深く拡大していく。最終楽章のアレグロのフィナーレでは、“うねり”“鏡”“眼差し”“謎”で出現した諸要素が再現され、“謎”の主要な楽想が最後には支配的になっている。

ゴッホを出発点にした夜の瞑想

〈遥かなる遠い世界〉が文学的イメージと音楽の結合であるのに対し、〈音色・空間・運動、あるいは“星月夜”〉は、絵画的イメージと音楽の結合で、19世紀のオランダ出身でフランスで活躍したゴッホ（1853～1890）の絵に光があてられている。1978年に完成されたこの2楽章の作品は、1978年11月7日、ワシントンでロストロポーヴィチの指揮で世界初演された。ロストロポーヴィチとともにデュティユーの理解者だった指揮者のシャルル・ミュンシュの思い出に捧げられた。ミュンシュは10月定期でカンブルランが取り上げる交響曲第2番〈ル・ドゥーブル〉（1959）を初演している。

ヴィンセント・ファン・ゴッホ（1853－1890）『星月夜』1889.
ニューヨーク、ニューヨーク近代美術館（MoMA）油彩 カンヴァス、73.7×92.1cm、リリー・P・ブリス遺贈、Acc.n.:472.1941 ©2015. Digital image, The Museum of Modern Art, New York/Scala, Florence

この作品はゴッホの絵画『星月夜』を出発点にした「夜の音楽」の系譜に属している。デュティユーは夜の瞑想家であり、弦楽四重奏曲〈夜はかくのごとく〉（1976）などのナハト・ムジークを発表し、この作品では“ノクチュルヌ”とか“星座”といったタイトルを各楽章につけていた。ゴッホの『星月夜』をテーマにしたオーケストラ曲では、特別なオーケストレーションが用いられ、多くの木管楽器、金管楽器、金属打楽器を一つのグループとしてあつかい、ヴァイオリンとヴィオラのないチェロとコントラバスの低弦楽器のグループを対比的にあつかっている。

作曲者はその意図について次のように語っている。「オーケストラの極端に離れた音域間のコントラストの探求は、私の音楽家としての主要な関心事である。明るく輝く高音域の木管楽器群に、低音域の弦楽器群を対比させる音色の戯れによって、ひじょうに素晴らしい幻想的な絵画の「星の夜」の広い空間の印象を生みだそうとした。第1楽章が空間のイメージを作り、第2楽章が運動の感覚を生みだしている。

イギリスの音楽評論家のヴィルフレッド・メーラーズは、デュティユーについて、「美しいことを恐れない音楽家 a composer who is not afraid to be beautiful」と語っている。デュティユーの作品は数は多くはないが、そのいずれもが、きわめて密度が濃く、深く、美しい。こうして私たち聴き手は、デュティユーの屹立した精神によって生みだされた豊穣の海のなかを自由に泳ぐことができるのである。

（ふなやま たかし・東京芸術大学名誉教授）

◎打楽器奏者

野本洋介

Yosuke Nomoto

マーラーの独特の響き 聴き方が大きく変わりました

≪２月のプログラムではマーラーの交響曲第７番で打楽器が活躍します≫

実は、そんなに打楽器セクションは忙しくないのですが、目立つように感じられるのは、楽器の扱い方がうまいからですね。マーラーはよく使われる打楽器以外にルーテ（細い棒を束ねたものを打ち合わせて使う）やカウベル（牛の首につけるベル）、鐘などを使っています。身の回りにある音をコンサートホールに持ち込もうとした人なのかもしれません。交響曲第6番ではハンマーを振り下ろして大きな音を出します。あれが楽器なのかとも思いますが（笑）。こうした音は、指揮者によってイメージが異なるので注文も多く、試行錯誤の連続です。

≪打楽器はタイミングがずれるとオーケストラ全体に影響してしまう。極めて責任が重いですね≫

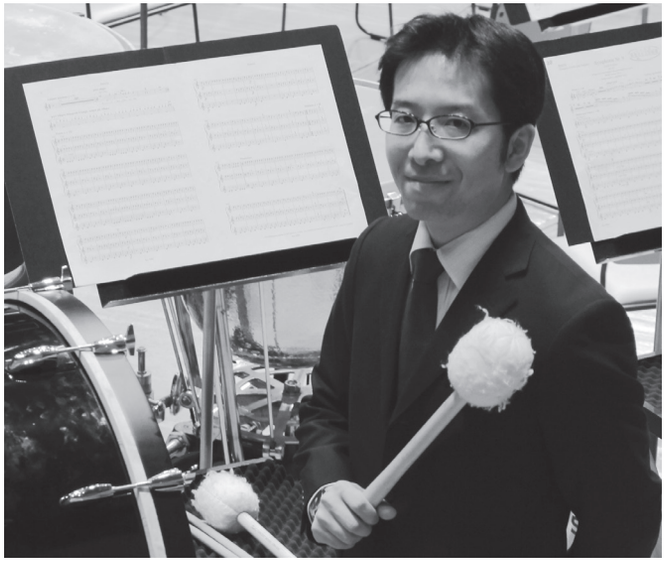
そうですね（汗）。指揮者、コンサートマスターからの距離も遠く、音を出すための動作も大きいので、とても集中力が必要です。ブルックナーの交響曲でのシンバルのように、ここぞ一発が決まると快感です。

打楽器奏者が大変なのはリハーサル前の「準備」です。作曲家は常に新しい響きを求めているので、聴いたことのない楽器が登場したり、思いもよらない奏法が指定されたりします。去年の欧州公演で演奏した酒井健治さんの作品では、ゴムホースを振り回してD（レ）の音を出し、また、仏具のリンをこすって音を出しました。仏具屋を何軒も回って良い音のものを探したんですよ。

たくさんの楽器がありますが、打楽器の基本的な動作は「打つ、こする、振る」の三つです。様々な音色、色彩を表現できる。それが打楽器の魅力ではないでしょうか。

≪３月に演奏するラヴェルのボレロは小太鼓が素敵です≫

あの曲がなければ、オーケストラの打楽器奏者はもっと楽だったかもしれません（笑）。個人練習する分には同じリズムを刻むだけですし、難しいことではない。ただ、演奏会で、チューニングが終わって静かになった瞬間、自分の心臓の音しか聴こえません。あの状況に慣れる日は来るのかなぁ。



≪野本さんは東京芸術大器楽科を卒業。打楽器奏者の一方、作曲、編曲にも熱心で、打楽器アンサンブルなど数多くの作品を披露しています≫

もともと興味はあったのですが、大学で和声の授業を受けて面白いと感じ、本格的に書き始めました。演奏と作曲は、自分の中では、つながっていてともに影響しています。例えば、そこが主和音なのか、属和音なのかで鳴らし方が違う。

打楽器はパート譜だけを見ていても何の役割だか分からないので必ずスコア（総譜）でチェックします。色々な作曲家のスコアを眺めながら自分だったらどうするかなと考えています。

≪最後に、今回演奏するマーラーの魅力について語って下さい≫

最初マーラーの交響曲を聴いた時、正直よく分かりませんでした。美しい旋律やかっこいい響きなど魅力的なところはたくさんあるのですが、場面転換は唐突過ぎるし、そもそも長いし（笑）、感情移入しづらく、他の作曲家と比べて、この人は一体何をしたいのだろう、何を表現したいのだろうとずっと疑問に思ってきました。ところが、2006年にセゲルスタムの指揮で第7番を演奏して、こんな破天荒な曲を書くなんてむしろ潔いと感じてしまい、マーラーを好きになってしまったのです。

「マーラーの曲を聴くと泣けてくる」という方がいます。彼の書いた交響曲は、波乱に満ちた生き方、不条理で割り切れないことばかりの世の中そのものだからではないでしょうか。

第1番から未完の第10番までが、人生のように全部つながっていて、第7番〈夜の歌〉はその途中、一部なんだと思います。

自分自身、2004年に入団、その後結婚し、母が亡くなり、子供が生まれ、と様々な体験を経てマーラーの聴き方も随分変わりました。

新鋭ツィガーンが振る〈アランフェス協奏曲〉&〈ボレロ〉

3/ 4（金）19:00　第22回 読響メトロポリタン・シリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

3/ 6（日）14:00　第185回東京芸術劇場マチネーシリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

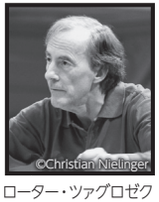
ユージン・ツィガーン

ビゼー：〈カルメン〉組曲から　ファリャ：〈三角帽子〉第2組曲
ロドリーゴ：アランフェス協奏曲　ラヴェル：ボレロ
指揮：**ユージン・ツィガーン**　ギター：**朴 葵姫**（パク・キュヒ）

ドイツの巨匠ツァグロゼクがブラームスで渾身のタクト

3/10（木）19:00　第590回 サントリーホール名曲シリーズ　サントリーホール

3/12（土）14:00　第86回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ　横浜みなとみらいホール

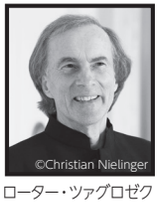


ローター・ツァグロゼク

ブラームス：悲劇的序曲　R.シュトラウス：メタモルフォーゼン
ブラームス：交響曲 第1番
指揮：**ローター・ツァグロゼク**

円熟を深めたツァグロゼクが魅せる迫真の〈英雄〉

3/17（木）19:00　第556回 定期演奏会　サントリーホール



ローター・ツァグロゼク

ベンジャミン：ダンス・フィギュアズ（日本初演）
コダーイ:組曲〈ハーリ・ヤーノシュ〉　ベートーヴェン:交響曲 第3番〈英雄〉
指揮：**ローター・ツァグロゼク**

入魂！“炎のコバケン”のチャイコフスキー〈1812年〉

3/24（木）19:00　第6回 東京オペラシティ名曲シリーズ　東京オペラシティ コンサートホール

小林研一郎

モーツァルト：歌劇〈フィガロの結婚〉序曲、ピアノ協奏曲 第20番
チャイコフスキー：弦楽セレナード、大序曲〈1812年〉
指揮：**小林研一郎**　ピアノ：**田部京子**

小林研一郎が導く魅惑の音絵巻〈シェエラザード〉

3/25（金）20:00　第13回 読響カレッジ　文京シビックホール　※19:30から解説

小林研一郎

リムスキー＝コルサコフ：交響組曲〈シェエラザード〉
指揮：**小林研一郎**　ナビゲーター：**中井美穂**

3月 公演の聴きどころ

3月4日と6日には、一昨年6月の大阪定期で初共演し絶賛された新鋭**ツィガーン**が再登場。人気曲〈ボレロ〉など情熱あふれるスペイン・プログラムを振る。ギター協奏曲の代表作〈アランフェス協奏曲〉では、世界最高峰のアルハンブラ国際コンクールで優勝するなど、今最も注目を集める若手ギタリストの**朴葵姫**（パクキュヒ）が共演。世界トップレベルと言われる美しいトレモロを奏で、スペイン情緒あふれるロドリーゴの音世界を鮮やかに表現するだろう。

3月中旬には、ドイツの重鎮**ツァグロゼク**が10年ぶりに来日し、初めて読響の指揮台に上がる。ツァグロゼクは、ライプツィヒ歌劇場やシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督、ベルリン・コンツェルトハウス管の首席指揮者などを歴任し、一時代を築いた巨匠。10日と12日にはブラームスの交響曲第1番とR.シュトラウスの〈メタモルフォーゼン〉という得意のドイツ・プログラムで、持ち前の堅固なドイツ・サウンドを響かせる。17日には、コダーイの代表作〈ハーリ・ヤーノシュ〉とベートーヴェン〈英雄〉を指揮する。皇帝ナポレオンにちなむ2作品を組み合わせた、独創的なプログラム。前半には、イギリスの現代作曲家G.ベンジャミン〈ダンス・フィギュアズ〉を日本初演。この作品は、モネ歌劇場などの委嘱でアンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル振付のダンス作品のために構想され、コンサート版は2005年にバレンボイム指揮シカゴ響で初演された。現代曲でも高い評価を得るツァグロゼクの手腕が発揮されるに違いない。

3月後半には、“炎のコバケン”こと読響特別客演指揮者の**小林研一郎**が来演。24日に、大序曲〈1812年〉など、得意のチャイコフスキーで熱いタクトを振る。日本を代表する実力派・**田部京子**が独奏を弾くモーツァルトのピアノ協奏曲第20番も聴きどころだ。小林は、25日には20時開演の《読響カレッジ》に登場。リムスキー＝コルサコフの名品〈シェエラザード〉をドラマティックに描き上げる。19時半からの解説もお楽しみに。　（文責：事務局）

読響チケットWEB　検索

絶美のハーモニー！ フィンジの知られざる傑作を披露

4/14（木）19:00　第557回 定期演奏会
サントリーホール

下野竜也

池辺晋一郎：多年生のプレリュード
ベートーヴェン：交響曲 第2番
フィンジ：霊魂不滅の啓示
指揮：下野竜也
テノール：**ロビン・トリッチュラー**
合唱：**二期会合唱団**（合唱指揮：**冨平恭平**）

下野が振る名曲選〈ヴォツェック〉&〈ジュピター〉

4/19（火）19:00　第591回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

エヴェリーナ・ドブラチェヴァ

ベルク（フォン・ボリース編）：パッサカリア
ベルク：歌劇〈ヴォツェック〉から3つの断章
モーツァルト：交響曲 第41番〈ジュピター〉
指揮：下野竜也
ソプラノ：**エヴェリーナ・ドブラチェヴァ**

世界へ羽ばたくヤマカズのチャイコフスキー〈悲愴〉

4/23（土）14:00　第186回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

4/24（日）14:00　第186回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

山田和樹

オネゲル：パシフィック231
グリーグ：ピアノ協奏曲
チャイコフスキー：交響曲 第6番〈悲愴〉
指揮：山田和樹
ピアノ：**小山実稚恵**

ウィーン・フィルに衝撃デビューしたシャニの〈巨人〉

4/29（金・祝）14:00　第87回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ラハフ・シャニ

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲
マーラー：交響曲 第1番〈巨人〉
指揮：ラハフ・シャニ
ヴァイオリン：**佐藤俊介**

トスカニーニ国際コンクール準優勝の三ツ橋が振る〈ボレロ〉

5/15（日）14:00　第88回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

三ツ橋 敬子

石川 滋

レスピーギ：バレエ音楽〈風変わりな店〉から
レスピーギ：交響詩〈ローマの噴水〉
ニーノ・ロータ：コントラバスと管弦楽のための協奏的ディヴェルティメント
ラヴェル：ボレロ
指揮：三ツ橋敬子
コントラバス：**石川 滋**（読響ソロ・コントラバス）

欧州で活躍する俊英カラビッツが得意のプロコフィエフを指揮

5/24（火）19:00　第558回 定期演奏会
サントリーホール

キリル・カラビッツ

エマニュエル・パユ

プロコフィエフ：交響的絵画〈夢〉
ハチャトゥリアン：フルート協奏曲
プロコフィエフ：交響曲 第5番
指揮：キリル・カラビッツ
フルート：**エマニュエル・パユ**

〈ロミオとジュリエット〉&“世界の女王”ムローヴァが共演！

5/28（土）14:00　第187回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

5/29（日）14:00　第187回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

5/31（火）19:00　第592回 名曲シリーズ
サントリーホール

キリル・カラビッツ

ヴィクトリア・ムローヴァ

ベルリオーズ：序曲〈ローマの謝肉祭〉
シベリウス：ヴァイオリン協奏曲
プロコフィエフ：バレエ音楽〈ロミオとジュリエット〉から
指揮：キリル・カラビッツ
ヴァイオリン：**ヴィクトリア・ムローヴァ**

お申し込み・お問い合わせ
読響チケットセンター 0570-00-4390（ヨミキョー）
（10:00〜18:00／年中無休）
ホームページ・アドレス **http://yomikyo.or.jp/**

セキスイハイム Presents
辻井伸行×三浦文彰　究極の協奏曲コンサート 完売

■2/16（火）19:00　市川市文化会館 大ホール
2/17（水）18:45　愛知県芸術劇場 コンサートホール
2/18（木）、2/19（金）19:00　フェスティバルホール（大阪）
2/21（日）14:00　岡山シンフォニーホール
2/22（月）19:00　福岡シンフォニーホール
2/24（水）、2/25（木）19:00　Bunkamura オーチャードホール
2/27（土）14:00　よこすか芸術劇場
2/28（日）15:00　栃木県総合文化センター メインホール

指揮：クリストファー・ウォーレン＝グリーン
ピアノ：辻井伸行　ヴァイオリン：三浦文彰

ラフマニノフ／ピアノ協奏曲 第2番
チャイコフスキー／ヴァイオリン協奏曲 ほか

※ 会場ごとにプログラム、料金、お問い合わせ先が異なります。詳細はオフィシャルサイト（http://avex.jp/classics/kyukyoku2015/）をご覧ください。

2016 都民芸術フェスティバル

■3/20（日）14:00　東京芸術劇場コンサートホール
指揮：下野竜也　ピアノ：小山実稚恵

ベートーヴェン／付随音楽〈アテネの廃墟〉序曲
ピアノ協奏曲 第4番
交響曲 第5番〈運命〉

［料金］A ¥3,800　B ¥2,800　C ¥1,800
［お問い合わせ］日本演奏連盟事務局　03-3539-5131

芸劇&読響　0才から聴こう!!　春休みコンサート

■3/30（水）11:30/13:30　東京芸術劇場コンサートホール
指揮：梅田俊明　ヴァイオリン：二瓶真悠　ナビゲーター：中井美穂

ビゼー／〈カルメン〉前奏曲
サラサーテ／ツィゴイネルワイゼン
ヴィヴァルディ／〈四季〉より“春”第1楽章
ベルリオーズ／ラコッツィ行進曲 ほか

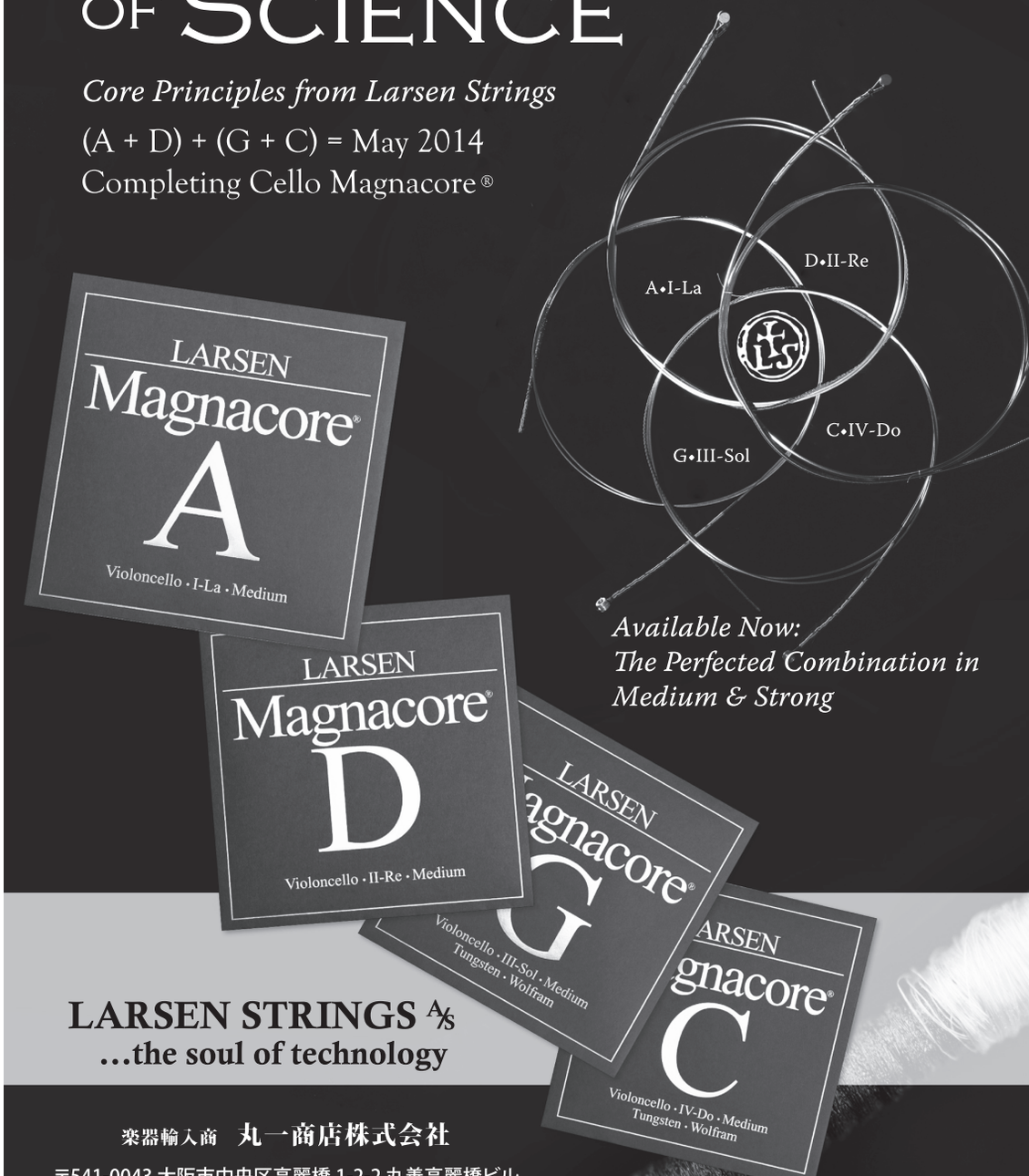
［料金］S ¥3,500　A ¥2,500　こども（3才以上小学生まで）¥1,000
［お問い合わせ］東京芸術劇場ボックスオフィス　0570-010-296

www.maruichi-shoten.co.jp

THE ART OF SCIENCE

Core Principles from Larsen Strings

(A + D) + (G + C) = May 2014
Completing Cello Magnacore®



Available Now:
The Perfected Combination in
Medium & Strong

LARSEN STRINGS A/S
…the soul of technology

楽器輸入商　丸一商店株式会社
〒541-0043 大阪市中央区高麗橋 1-2-2 丸善高麗橋ビル
Tel. 06-6201-0042　Fax. 06-6201-0087

輸入元　MARUICHI-SHOTEN

Highlights of 2016−17 season

今月号では、読響の2016年度シーズンにソリストとして登場するピアニストにスポットを当てて、聴きどころをご紹介します。

ピアニスト

ウクライナの俊英フェドロヴァ登場

6月11日の《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》(横浜みなとみらいホール)、12日の《パルテノン名曲シリーズ》(パルテノン多摩大ホール)で読響に初登場する**アンナ・フェドロヴァ**は1990年、ウクライナ・キエフ生まれの俊英。2009年のルービンシュタイン国際ピアノコンクールで優勝して一躍注目を集め、ニューヨークのカーネギーホールをはじめ世界のひのき舞台に登場しています。**ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番**は彼女の十八番。躍動感あふれるみずみずしい演奏で聴衆を魅了することでしょう。

アンナ・フェドロヴァ

また6月18、19日の《土曜マチネーシリーズ》《日曜マチネーシリーズ》(東京芸術劇場)で、**ベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番〈皇帝〉**を弾くのは、スペインの若手**ハヴィエル・ペリアネス**。バレンボイムの薫陶(くんとう)を受けた逸材でヨーロッパでの評価も高く、本格派の演奏が期待されます。

ハヴィエル・ペリアネス ©Josep Molina

日本の名手たちも続々と

日本人に目を転じると、まず4月23、24日の《土曜マチネー》《日曜マチネー》に、日本を代表するピアニストで幅広いファンを持つ**小山実稚恵**が出演。世界で活躍する**山田和樹**と**グリーグのピアノ協奏曲**を共演します。そして6月29日の《名曲シリーズ》(サントリーホール)、30日の《大阪定期演奏会》(フェスティバルホール)では、若手実力派の**小菅優**が**リスト**の難曲、**ピアノ協奏曲第2番**を演奏し、情熱と技巧をアピールします。

小山実稚恵 ©ND CHOW

小菅 優 ©Marco Borggreve

7月23、24日の《土曜マチネー》《日曜マチネー》では16歳の気鋭、**牛田智大**(ともはる)が、**ショパンのピアノ協奏曲第2番**を弾きます。ロマンチックな香りにあふれる青春の音楽が楽しめそうです。

牛田智大 ©Kunio Onishi

注目のシュタットフェルトとベテラン

10月8、9、10日の《土曜マチネー》《日曜マチネー》《みなとみらいホリデー名曲》には、個性的な演奏で人気のドイツの**マルティン・シュタットフェルト**が初登場。**モーツァルトのピアノ協奏曲第15番**に挑みます。モーツァルト中期の充実した協奏曲で、どんな演奏を聴かせてくれるのか楽しみです。

マルティン・シュタットフェルト ©Uwe Arens

ベテラン勢も続々来日します。スペインが誇る名手**ホアキン・アチュカロ**は9月16日の《名曲》で、異国情緒あふれる**ファリャの交響的印象〈スペインの庭の夜〉**で華麗なピアニズムを披露します。

ホアキン・アチュカロ ©Greg Schaler

一方、ロシアの大ベテラン、**ヴィクトリア・ポストニコワ**は9月26日の《定期演奏会》(サントリーホール)で**ショスタコーヴィチ**の初期の傑作、**ピアノ協奏曲第1番**でダイナミックな演奏を聴かせます。

ヴィクトリア・ポストニコワ

2人の大物、デームスとポゴレリッチ

11月24日の《定期》には、1928年生まれのオーストリアの巨匠**イェルク・デームス**を迎えます。曲目は**ベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番**。19世紀ウィーンの伝統を受け継ぐデームスの演奏は、日本の音楽ファンへの貴重な贈り物になるでしょう。

イェルク・デームス ©H.Kiyotane

続く12月13日の《定期》には、セルビア出身の鬼才**イーヴォ・ポゴレリッチ**が登場します。衝撃的なデビューを飾った1980年のショパンコンクール以来、その独創的で「異端」ともいえる演奏は、常に注目を浴びています。演奏するのはロマンティックな協奏曲の決定版とも言える**ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番**。誰もが知る名曲にどんなアイデアをもって臨むのか、目が離せません。

イーヴォ・ポゴレリッチ ©Alfonso-Batalla

最後に日本期待の若手をもう1人。12月2日の《名曲》、3日の《パルテノン名曲》で名曲中の名曲、**チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番**を弾くのは、1996年生まれの**松田華音**(かのん)。ロシア留学で培ったスケールの大きな音楽が花開くことでしょう。

松田華音 ©Ayako Yamamoto